

垂仁天皇

<私見>在位年数

天皇の年代引き延ばしでは、書紀は、即位年～崩御年（在位年数）を、都合よく区切っているように思える。
便宜上、引き延ばし在位仮年数を10年単位とすると、単純計算で3倍戻し在位実年数は、

書紀引き延ばし仮年（在位年数）	※3倍戻し実年（実年数）
9代 開化：BC160～BC100年（60年）	開化：AD 227 — 247年（20年）
10代 崇神：BC100～BC 30年（70年）	崇神：AD 247 — 271年（24年）
<u>11代 垂仁：BC 30～AD 70年（100年）</u>	<u>垂仁：AD 271 — 304年（33年）</u>
12代 景行：70～130年（60年）	景行：AD 304 — 324年（20年）
13代 成務：130～190年（60年）	成務：AD 324 — 344年（20年）
14代 仲哀：190～200年（10年）	仲哀：AD 344 — 347年（3年）
（神功皇后）：200～270年（70年）	神功：AD 347 — 371年（24年）
15代 応神：270～310年（40年）	応神：AD 371 — 384年（13年）
16代 仁徳：310～400年（90年）	仁徳：AD 384 — 414年（30年）

※仁徳以前は、皇統系図と生年・即位・崩年の記録が、不確定だったのかもしれない。

または、天皇の「皇統」と「遷都」の問題が、解決されていなかったか。

（例：日向の古都、豊前の古都、阿波の古都、など。）

※垂仁40～87年（AD11～58年に相当）の途中の記録が無いというのも、不自然な感じがする。

<参照>垂仁天皇 『参照（Wikipedia）』

- 活目入彦五十狹茅天皇（いくめいりびこいさちのすめらみこと） - 『日本書紀』
- 活目天皇（いくめのすめらみこと） - 『日本書紀』
- 活目尊（いくめのみこと） - 『日本書紀』
- 伊久米伊理毘古伊佐知命（いくめいりびこいさちのみこと） - 『古事記』
- 伊久米天皇 - 『常陸国風土記』
- 生目天皇 - 『令集解』所引「古記」
- 伊久牟利比古（いくむにりひこ）大王 - 『上宮記』

漢風諡号である「垂仁天皇」は、代々の天皇と同様、奈良時代に淡海三船によって撰進された。

『日本書紀』の伝えるところによれば、以下のとおりである。

崇神天皇 29年 1月1日、誕生（崇神天皇元年の条では、御間城姫はこれより前に垂仁天皇を生んだとある）

崇神天皇 48年 4月、皇太子に立てられる。

垂仁天皇 元年 1月、即位。

垂仁天皇 2年 2月、狹穗姫命を立后
10月、纏向に遷都。

垂仁天皇 3年 3月、新羅王子の天日槍が神宝を奉じて来朝。

垂仁天皇 5年 10月、皇后の兄・狹穗彦王が叛乱を起こし、皇后は兄に従って焼死。

垂仁天皇 7年 7月、野見宿禰が当麻蹴速と相撲をとり蹴殺す（相撲節会の起源説話）。

垂仁天皇 15年 2月、丹波道主王の女たちを後宮に入れる

8 月、後宮に入れた丹波道主王の女たちから日葉酢媛命を皇后とした。

垂仁天皇 23 年 鳥取部、鳥養部、譽津部が設けられた（狭穗姫の遺児の譽津別命が初めて言葉を発した）

垂仁天皇 25 年 3 月、天照大神の祭祀を皇女の倭姫命に託す（元伊勢伝承）。

垂仁天皇 27 年 8 月、諸神社に武器を献納し神地・神戸を定める。
来目（奈良県橿原市久米町）に初めて屯倉を興す。

垂仁天皇 28 年 殉死の禁令。

垂仁天皇 32 年 7 月、日葉酢媛命が薨去。野見宿禰の進言に従い、殉死の風習に替えて埴輪を埋納する（埴輪の起源説話）

垂仁天皇 35 年 五十瓊敷入彦命に河内国の高石池や茅渟（ちぬ）池を始め多くの池溝を開かせた。

垂仁天皇 37 年 大足彦尊を皇太子とする。

垂仁天皇 39 年 10 月、五十瓊敷入彦命が剣千振を作り石上神宮に納める。この後、五十瓊敷命に命じて、同神宮の神宝を掌らせる。

...

垂仁天皇 88 年 7 月、天日槍の曾孫の但馬清彦に但馬の神宝を献上させる

垂仁天皇 90 年 2 月、天日槍の玄孫の田道間守に命じて常世国の非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）を求めさせる。

垂仁天皇 99 年 7 月、崩御。140 歳（『古事記』では 153 歳。崇神天皇 29 年から数えれば 139 歳、『大日本史』）。
12 月、菅原伏見陵に葬られた。

景行天皇元年 3 月、田道間守が帰国。

■垂仁（前半の部）

崇神 6 5 年～垂仁 2 年：（書紀 BC33 年、実年 AD270 年） 都怒我阿羅斯等

<参照>蘇那曷叱知 『参照 (Wikipedia)』

蘇那曷叱知（そなかしち、蘇那曷叱智）は、『日本書紀』に伝わる古代朝鮮の人物。

任那からの最初の朝貢使とされる。

『日本書紀』によれば、崇神天皇 65 年 7 月に任那から朝貢のため来朝し、垂仁天皇 2 年に帰国したという。また、その帰国に際して天皇から任那王へと赤絹 100 匹（200 段）が贈られたが、途中でこれを新羅に奪われたといい、これが任那と新羅の争いの始まりであるとしている。

蘇那曷叱知に関する『日本書紀』の説話は、加耶からの渡来開始を説明するものであるとともに、加耶と新羅との争いの始まりを伝えるものである。名前の「蘇那曷叱知」とは朝鮮における借音字と考えられており、その訳語としては金仇玄（金官国第十代）の子の金奴宗とする説、于斯岐阿利叱智干岐（都怒我阿羅斯等の別名）とする説、金官国邑君とする説、弁辰の渠帥（貴人）とする説などがある。

また、垂仁天皇 2 年の分注には大加羅国（大加耶：加耶諸国の 1 つ）王子の都怒我阿羅斯等による「任那（みまな）」の語源伝承が載せられているが、この都怒我阿羅斯等と蘇那曷叱知とを同一視する説がある。

垂仁 2 年：（書紀 BC28 年、実年 AD271 年） 任那

<参照>都怒我阿羅斯等 『参照 (Wikipedia)』

都怒我阿羅斯等（つねがあらしと、生没年不詳）は、『日本書紀』に伝わる古代朝鮮の人物。

『日本書紀』では「都怒我阿羅斯等」、他文献では「都怒賀阿羅斯止」「都怒何阿羅志止」「都奴加阿羅志等」とも表記される。また『日本書紀』では別名を「于斯岐阿利叱智干岐（うしきありしちかんき）」とする。意富加羅国（大加耶/大加羅、おほからのくに、現在の韓国南部）の王子で、地名「敦賀（つるが）」の由来

の人物といわれる。

『日本書紀』では垂仁天皇 2 年条の分注として 2 つの所伝が記載されている。1 つ目として崇神天皇の時、額に角の生えた都怒我阿羅斯等が船で穴門から出雲国を経て筥飯浦に来着したという。そしてこれが「角鹿（つぬが）」の語源であるとしている（角鹿からのちに敦賀に転訛）。また垂仁天皇の時の帰国の際、天皇は阿羅斯等に崇神天皇の諱（御間城くみまき>天皇）の「みまき」を国名にするよう詔した（任那（弥摩那）の語源）。その時に阿羅斯等々に下賜した赤絹を新羅が奪ったといい、これが新羅と任那の争いの始まりであるとする。

2 つ目の所伝では、阿羅斯等が国にある時、黄牛の代償として得た白石が美しい童女と化したため、阿羅斯等は合（まぐわい）をしようとした。すると童女は阿羅斯等のもとを去って日本に行き、難波並びに豊国の国前郡の比売語曾社の神になったという。

なお 2 つ目の所伝の関連伝承が、『古事記』の天之日矛（天日槍）・阿加流比売神説話や、『摂津国風土記』逸文（『萬葉集註釈』所引）に見える。

垂仁 3 年：（書紀 BC27 年、実年 AD271 年） 天日矛

<参照>天日槍／天日矛 『参照 (Wikipedia)』

アメノヒボコは、記紀等に伝わる新羅からの渡来人または渡来神。

『日本書紀』では「天日槍」、『古事記』では「天之日矛」、他文献では「日杵（ひぼこ）」のほか「天日槍命」・「天日杵命」・「海槍槍（あまのひぼこ）」とも表記される。

『日本神話』・『古事記』等では渡来人、『播磨国風土記』では渡来神と位置づけて記述される。

『日本書紀』では、垂仁天皇 3 年 3 月条において新羅王子の天日槍が渡来したと記す。その際に次の 7 物、

- ・羽太の玉（はふとのたま） 1 箇
- ・足高の玉（あしたかのたま） 1 箇
- ・鶴鹿鹿の赤石の玉（うかかのあかしのたま） 1 箇
- ・出石の小刀（いづしのかたな） 1 口
- ・出石の杵（いづしのほこ） 1 枝
- ・日鏡（ひのかがみ） 1 面
- ・熊の神籬（くまのひもろき） 1 具

を持ってきて、これらを但馬国に納め永く神宝としたという。

同条に記された別伝によると、天日槍は初め播磨国に停泊して宍粟邑にいた。これに対し、天皇は大友主（三輪氏祖）と長尾市（倭氏祖）とを播磨に派遣して天日槍の尋問をさせた。この時、天日槍は新羅王子であると自称し、日本に聖皇がいると聞いたので新羅を弟の知古（ちこ）に任せて自分は日本への帰属を願ってやって来た、と語った。そして次の 8 物、を献上した。

（※胆狭浅の大刀（いささのたち） 1 口 を含む。）

そこで天皇は播磨国宍粟邑と淡路島出浅邑の 2 邑に天日槍の居住を許したが、天日槍は諸国を遍歴し適地を探すことを願ったので、これを許した。そこで天日槍は、菟道河（宇治川）を遡って近江国吾名邑にしばらくいたのち、近江から若狭国を経て但馬国に至って居住した。近江国鏡村の谷の陶人（すえびと）が天日槍の従者となったのは、これに由来するという。また天日槍は但馬国出島（出石に同じ）の太耳の娘の麻多鳥（またお）を娶り、麻多鳥との間の子に但馬諸助（もろすく）を儲けた。そしてこの諸助は但馬日槍杵（ひならき）を儲け、日槍杵は清彦（きよひこ）を、清彦は田道間守を儲けたという。

『古事記』では、比売碁曾社（比売許曾神社）の由来が天日槍と阿加流比売神の伝承として記述されるが、『日本書紀』では垂仁天皇 2 年条の注において都怒我阿羅斯等とその妻の伝承として記述されている。

<私見：前半の部>都怒我阿羅斯等と天日槍（天日矛）

日本書紀引き延ばしでは、垂仁3年は、BC27年に当たる（垂仁1年がBC28年充当）。実年AD272年

実年のBC27年頃は、海部氏3代天村雲、安曇氏武位起、の頃に相当する。

この頃に、年代を重ねるべき、特別な逸話はないように思われるが、

比売許曾神社の「阿加流比売」伝承を、加羅・新羅との交流関係に重ねようとしたのかもしれない。

（新羅王「脱解」⇒高句麗王「大武神王」が活躍した時期。）

都怒我阿羅斯等（≡蘇那曷叱知）は、垂仁2年に加羅（≡伽耶）の王子が、出雲経由で敦賀（気比浦）に、上陸している。のちに、加羅に帰郷して御真木入彦（崇神）の名を取って、「任那」と名付けている。

一方、天日矛（天日槍）は、垂仁3年に新羅の王子が、播磨に船で上陸し、神宝を献上した後、但馬に居住している。時期もほぼ同じで、よく似た話だが、出身とその後の身の振り方が異なっている。

天日矛は、但馬国（丹波）で、現地の娘を娶り、田道間守、息長垂姫（神功皇后）の母方の祖となる。
（出石神社：豊岡市但馬。伊弉諾神宮と経度が全く同じ134度51分：真北方向に当たる重要な位置。）

■垂仁（後半の部）

垂仁90年：（書紀AD61年、実年AD301年） 田道間守

<参照>田道間守 『参照（Wikipedia）』

田道間守（たじまもり/たちまもり）は、記紀に伝わる古代日本の人物。

『日本書紀』では「田道間守」、『古事記』では「多遲摩毛理」「多遲麻毛理」と表記される。

天日槍の後裔で、三宅連（三宅氏）祖。現在は菓子の神・菓祖としても信仰される。

田道間守の生まれについて、『日本書紀』垂仁天皇3年条では天日槍（新羅からの伝承上の渡来人）の玄孫で、清彦の子とする。一方『古事記』応神天皇段では、天之日矛（天日槍）の玄孫は同じながら多遲摩比那良岐（但馬日槍杵）の子とし、清日子（清彦）は弟とする。

『日本書紀』垂仁天皇紀によれば、垂仁天皇90年2月1日に田道間守は天皇の命により「非時香菓（ときじくのかくののみ）」すなわちタチバナ（橘）を求めに常世の国に派遣された。しかし垂仁天皇99年7月1日に天皇は崩御する。翌年（景行天皇元年）3月12日、田道間守は非時香菓8竿8縵（やほこやかげ：竿・縵は助数詞で、葉をとった8枝・葉のついた8枝の意味）を持って常世国から帰ってきたが、天皇がすでに崩御したことを聞き、嘆き悲しんで天皇の陵で自殺したという。

『古事記』垂仁天皇段によれば、多遲摩毛理は「登岐士玖能迦玖能木実（ときじくのかくのこのみ）」（同じく橘）を求めに常世国に遣わされた。多遲摩毛理は常世国に着くとその実を取り、縵8縵・矛8矛を持って帰ってきた。しかしその間に天皇は崩御していたため、縵4縵・矛4矛を分けて大后に献上し、もう縵4縵・矛4矛を天皇の陵の入り口に供え置いて泣き叫んだが、その末に遂に死んだという。

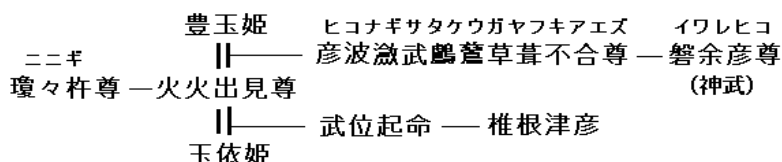
「たじまもり/たちまもり」の名称については、「但馬国の国守（くにもり）」の意味とする説がある。この「たじまもり/たちまもり」の類音からタチバナ伝来の物語が引き出されたと見られ、「タチバナ」という名前自体を「タヂマバナ（田道間花）」の転訛とする説もある。

上記説話に見えるような果物や薬草を求めて異界に行く話は世界各地に伝わるが、この説話には特に中国の神仙思想の影響が指摘される（一例に秦の徐福が蓬萊に不老不死の薬を求める伝説）。内藤湖南は『卑彌呼考』において、『魏志』倭人伝に卑弥呼から魏へ遣わされたと見える大夫難升米を田道間守に比定しているが、『日本書紀』では卑弥呼は神功皇后の時代とされており、田道間守が常世の国に派遣された垂仁天皇90年を機械的に西暦に換算すると61年になる。

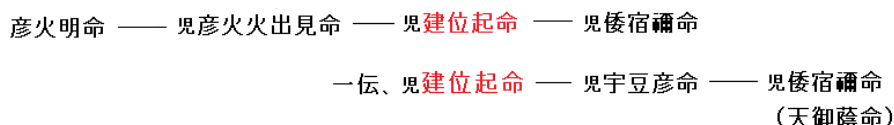
これは、倭（委）奴国王が後漢の光武帝から金印を授けられた57年に近いため、書紀の編者は田道間守を倭奴国の大夫と考えていたことが推測される。（?）

<参照：武位起> <https://somosora.hateblo.jp/entry/2018/11/14/>

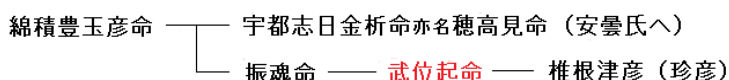
<旧事紀>



《勘注系図・海部氏》



《新撰姓氏録・安曇氏》



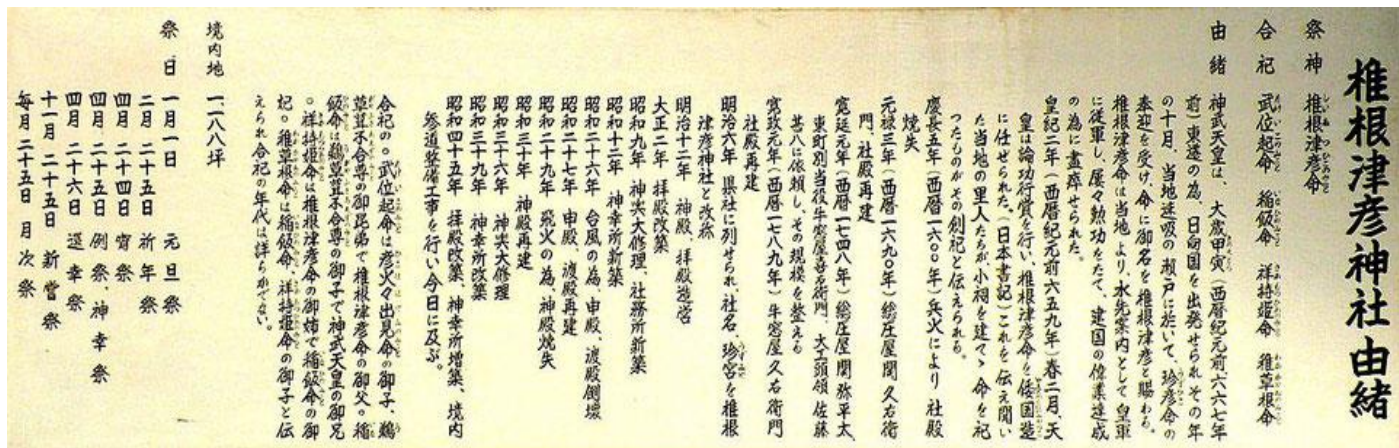
<参照：椎根津彦> 『参照 (Wikipedia)』

父は綿津見神の孫・武位起命で、子に志麻津見命がいる。また兄弟に八木氏の祖である八玉彦命が、従弟に高倉下がいる。

神武天皇が東征において速吸門で出会った国津神で、船路の先導者となる。このとき、『日本書紀』では曲浦（わだのうら）で魚釣するところを椎の棹を授けて御船に引き入れて名を珍彦（うづひこ）から椎根津彦に改めさせたとあり、『古事記』では亀の甲羅の上に乗っていたのを棹をさし渡し御船に引き入れて槁根津日子の名を賜ったという。

『日本書紀』ではその後、神武天皇に献策して兄磯城を挟み撃ちにより破る。また神武天皇の即位後に褒賞として倭国造に任命された。

速吸門については諸説ある。『日本書紀』では豊予海峡を指すと考えられており、大分県大分市佐賀関には、椎根津彦を祀る椎根津彦神社がある。『古事記』では吉備国の児島湾口を指すと考えられる。岡山県岡山市東区水門町には、珍彦（宇豆毘古命、うづひこのみこと）の乗った大亀の化身とされる亀岩を祀る亀石神社（かめいわじんじゃ）がある。あるいは『古事記』が吉備の高島宮から浪速に行く間に速吸門を通ったとある点から、これを明石海峡とする考え方もある。



<私見：後半の部> 田道間守と椎根津彦

日本書紀引き延ばしでは、垂仁90年は、AD61年に当たる（垂仁1年がBC28年充当）。**実年AD301年**

書紀は、**実年AD301年の田道間守**を、**AD57年「神武東征」途上の椎根津彦**（倭宿禰）に重ねているようだ。または、垂仁を**常根津彦**（懿徳の某兄）に重ねているとも考えられる。

倭宿禰は、勘注系図では、**建位起の子**で、記紀では**速吸門（豊予海峡／明石海峡）**で、**亀（舟）に乗って**、**磐余彦を迎え**に行って大和へ先導している。

倭宿禰は、その後、勘注系図では、**海部氏3代天村雲**の養子になっている。

<仮説>

仮に、椎根津彦（倭宿禰）が、AD57年、光武帝から金印を受けた「大夫」とすれば、極南界の「委奴国」とは、豊予海峡側で、豊前伊都国の使者であったと考えられる。

（常根津彦は、当時、伊都国を任された王かもしれない？ 常世に遣わした王という意味。）

建位起（武位起命）は、対馬の**海神豊玉彦／志賀島の安曇氏**の子孫である。

旧事紀では、**武位起は火遠理尊と玉依姫の御子**となっている。書紀は、この事実を隠蔽したのだろう。

※倭人伝の「一大率」とは、「**（位起／壱岐）の帥（そち）**」と読める。